

B 十三湊遺跡隠居地点及び周辺の地形と表層地質

1 地域概観

今回発掘をおこなった十三湊遺跡隠居地点は、青森県北津軽郡市浦村十三の南にあり、津軽平野北端の十三湖と日本海とはさまれた旧期砂州上に立地している。

十三湖の南に細長く広がる津軽平野は、平野中央の五所川原、木造以北において、海拔5 m以下、平均勾配0.1/1000~0.2/1000程度の低湿なデルタ性沖積地となっており、縄文時代の高海水準期にはこのデルタ性沖積地の範囲に当時の水域（古十三潟）が広がっていたと考えられる〔海津 1976〕（第96・97図）。

デルタ性沖積地は東側を海拔400~700 mに及ぶ津軽山地とその山麓に発達する洪積段丘群、西側を屏風山によってはさまれている。長さ25 km、幅5 kmに及び、デルタ性沖積地を日本海から隔絶している屏風山は、洪積世の山田野段丘とその上に顕著に発達する縦列砂丘とによって特徴づけられ、30~80 mの海拔高度を持っている。屏風山の北端にあたる車力村栗山以北では、洪積段丘は発達せず、地表面の海拔高度も20 m以下となっている。これは、旧期砂州及びそれに相当する沖積段丘をおおって砂丘が発達した状態であると考えられる。

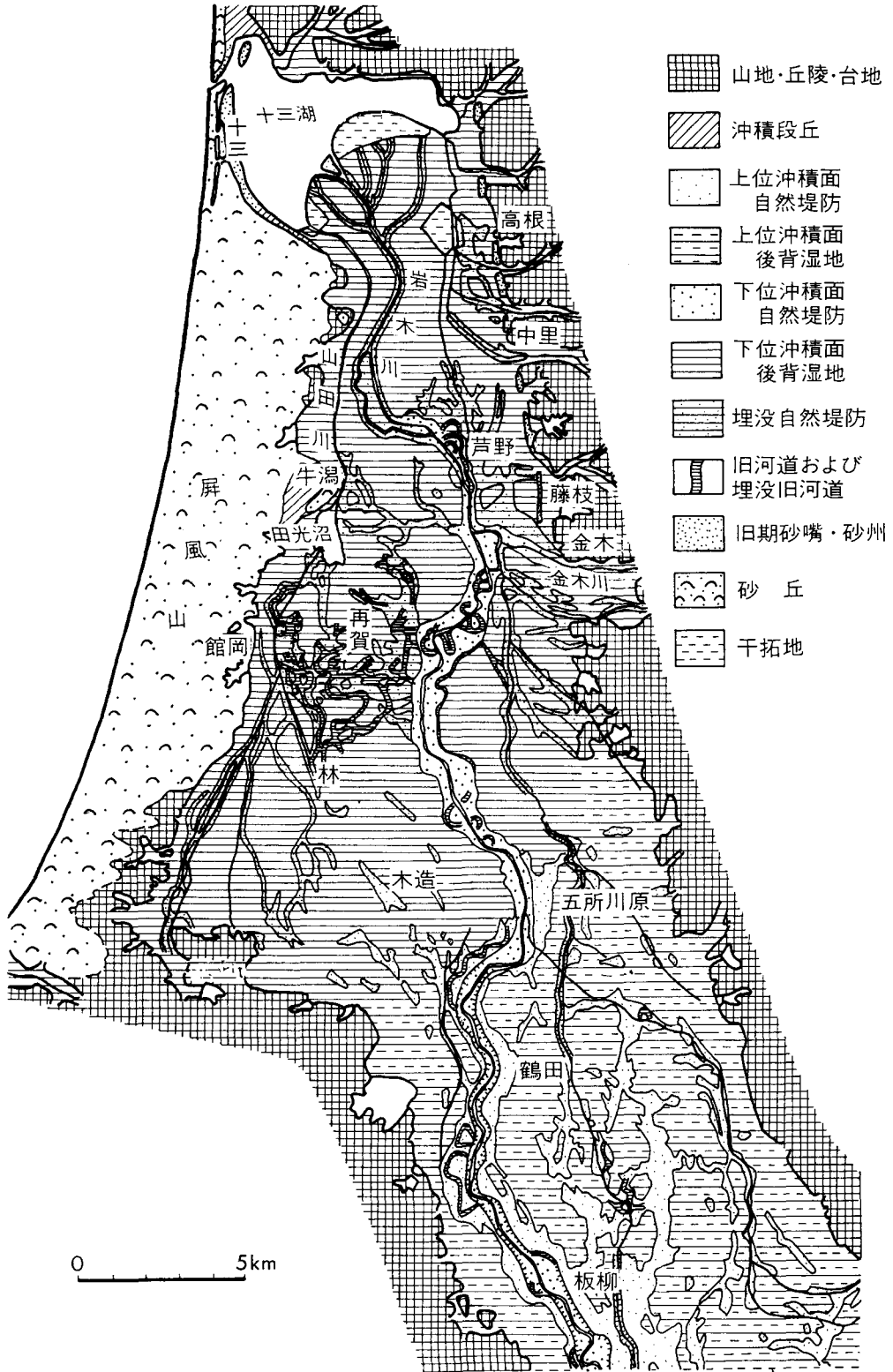
なお、十三湖と日本海とは、現在、約200 mの幅をもつ水戸口で通じているが、これは明治年間に開さくされたもので、以前は、新期砂州と旧期砂州とはさまれた、前潟・内潟・明神沼を連ねた水路で日本海に通じていたことが知られている。

2 調査地付近の地形

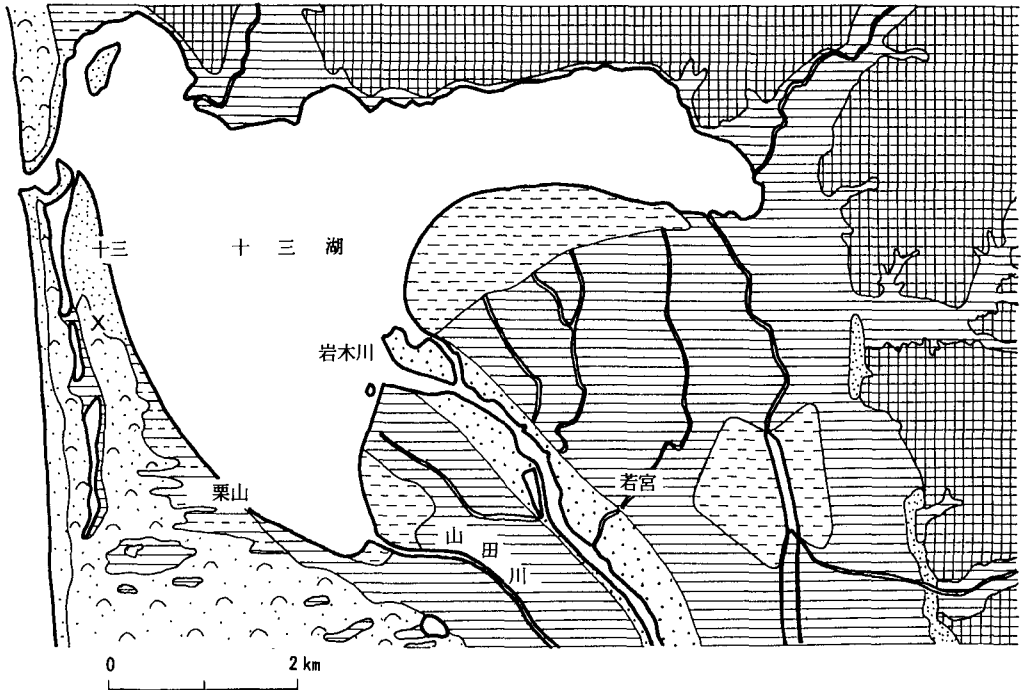
調査地の伝壇林寺跡は、十三集落をのせる東西約500 m、南北約3 kmほどの旧期砂州上に位置し、十三集落の南のはずれの砂州の北端から約1.8 km、十三~車力を結ぶ道路から約50 mほど西に入った中島製材所の背後の林地にあたる。付近の海拔高度は3.5~7 mで、砂丘砂に薄くおおわれたなだらかな起伏をもつ地域である。

今回の発掘地点は全体として東にゆるく傾斜した斜面であるが、北に隣接する畑及び南に隣接する松林とのそれぞれの境界付近において、北及び南への比較的急傾斜な部分が認められる。

調査地の中央部西端に位置する忠魂碑の東側には西からほぼ直角に曲がって南にのびる小さな谷が認められるが、それ以外には流水の作用を顕著に示す地形は認められない。また、中島製材所のすぐ裏の畑及び電線より東側の地域（中島製材所及び道路の東側の地域）はほぼ平坦な4 m前後の海拔高度をもつ地域となっており、砂丘砂にほとんどおおわれない旧期砂州堆積面であると考えられる。



第96図 津軽平野の地形分類図



第97図 十三湖周辺の地形分類図

凡例は第96図と共通。X：十三湊遺跡隠居地点

3 調査地の表層地質

調査地は砂丘砂をのせる旧期砂州上に位置しており、砂質の堆積物よりなる。しかしながらそれらは均質ではなく、粒度組成、色調などにより数層に区分できる。ここでは下位から、IV・III・II・I層に区分し、更にI層をI-b-3・I-b-2・I-b-1・I-b-0・I-a-1・I-a-0に細分した。各層の特徴を以下に示す。

<IV層>:

黄褐色（乾燥状態で10YR 4/3⁽¹⁾：にぶい黄褐色）の細～粗砂。2 mm程度の小礫を若干含んでいるが、シルト分はほとんど含まず、全体としてかなり粗い感じがする。上部20cm程度が比較的しまった状態となっているが、粒度組成・色などについては下部とかわりない。層厚は1 m以上あり、下限は不明である。見かけ上からは、旧期砂州の堆積物であるか砂丘砂であるかの判断は困難であるが、IV層上面が地表とほぼ同じ起伏をしていること、上面高度がEトレンチなどで6 mにも達する⁽²⁾ことから砂丘砂と考えてよいと思う。

<III層>:

IV層の上にある暗褐色（乾燥状態では10YR 4/2：灰黄褐色）の砂層。小礫・粗砂を若干含むが全体としてはIV層に比べて細粒で、細～中砂を主体とし、シルト分をわずかに含んでいる。

層厚は10cm前後。

Ⅲ層の暗色の砂がいわゆる砂丘砂中のクロスナと同類のものと考えらるなら、この時期に砂丘の固定、すなわち植物の被覆があったと推定することができる。

<Ⅱ層>:

層厚5～15cmの淡褐色シルト質砂。乾燥状態の土色は10YR 3/3（暗褐色）。Ⅲ層とよく似た細～中砂よりなるが、シルト分の割合が多く、全体として硬くしまっている。乾燥状態ではⅣ層に比べて暗い色であるが、トレンチの断面ではⅣ層に似た色を示している。

<Ⅰ層>:

全体として腐植質に富み、暗～黒褐色を呈する。Ⅰ層は場所により更に細分することができ、一般に高い位置において複雑な、低い位置において細分の困難な単純な堆積状態となっている。層厚についても、Ⅰ層全体では30～70cm程度であるが、高い位置では厚く、低い位置では薄い傾向をもつ。

Ⅰ層の細分は次のように特徴に基づく。

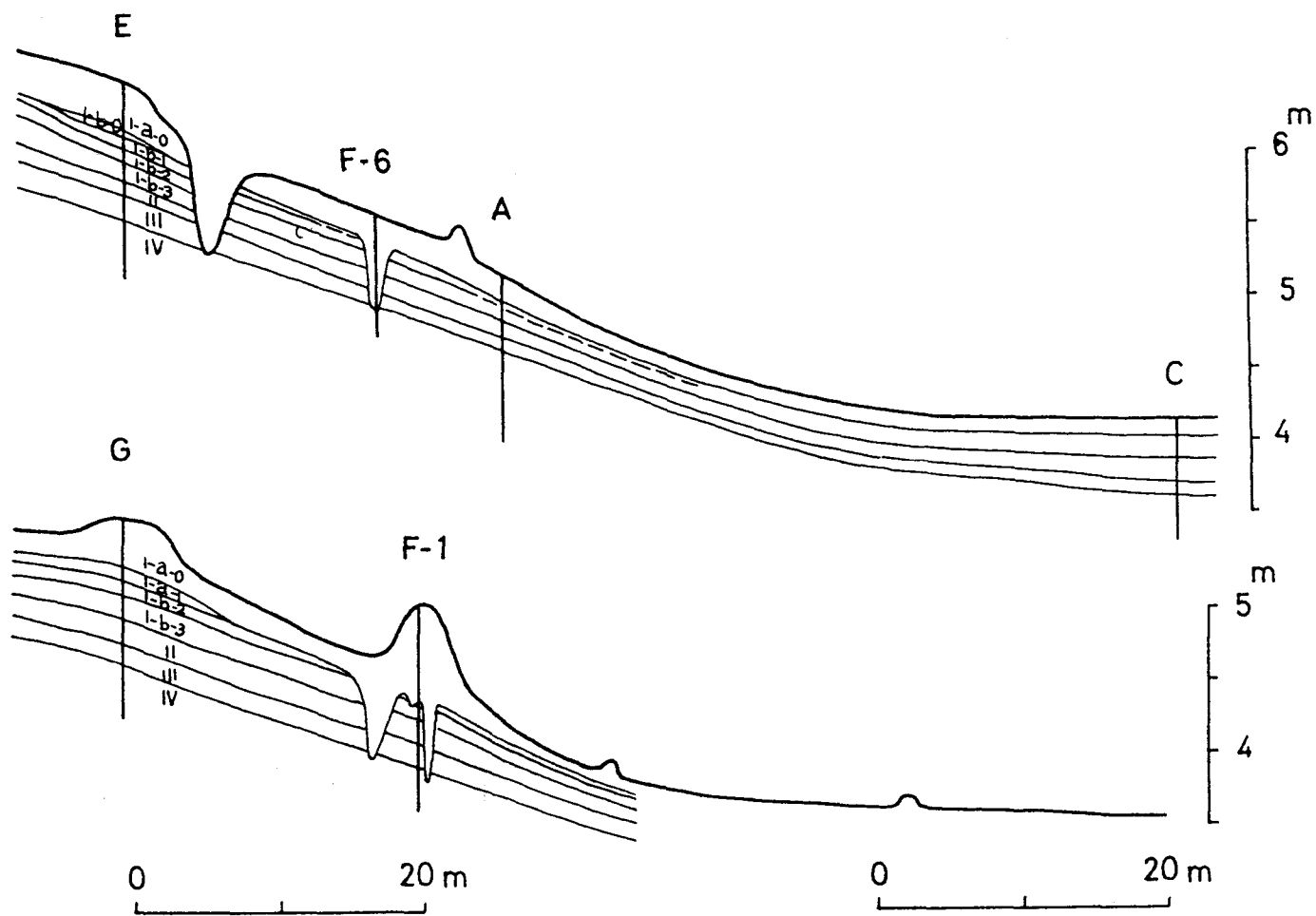
Ⅰ層	比較的粗粒	I-a-0…顕著な腐植。中～粗砂，小礫混り。
		I-a-1…わずかに腐植質。中～粗砂，小礫混り。
	比較的細粒	I-b-0…わずかに腐植質。シルト質中砂。
		I-b-1…腐植質。シルト質中砂。
		I-b-2…やや腐植質。シルト質細～中砂，比較的硬い。
		I-b-3…顕著な腐植。シルト質中砂。

これらのうち、I-a-0、I-b-2、I-b-3は大部分のトレンチに共通して認められ、乾燥状態の色はそれぞれ2.5Y 3/1（黒褐色）、10YR 3/1（黒褐色）、7.5YR 3/1（黒褐色）である。I-a-1、I-b-0、I-b-1はEおよびGトレンチなどで観察されたが、I-a-1は次節で詳しく述べるようにAトレンチのピットあるいはA'トレンチの小さな浅い溝を充填する堆積物としても認められた（第98図）。

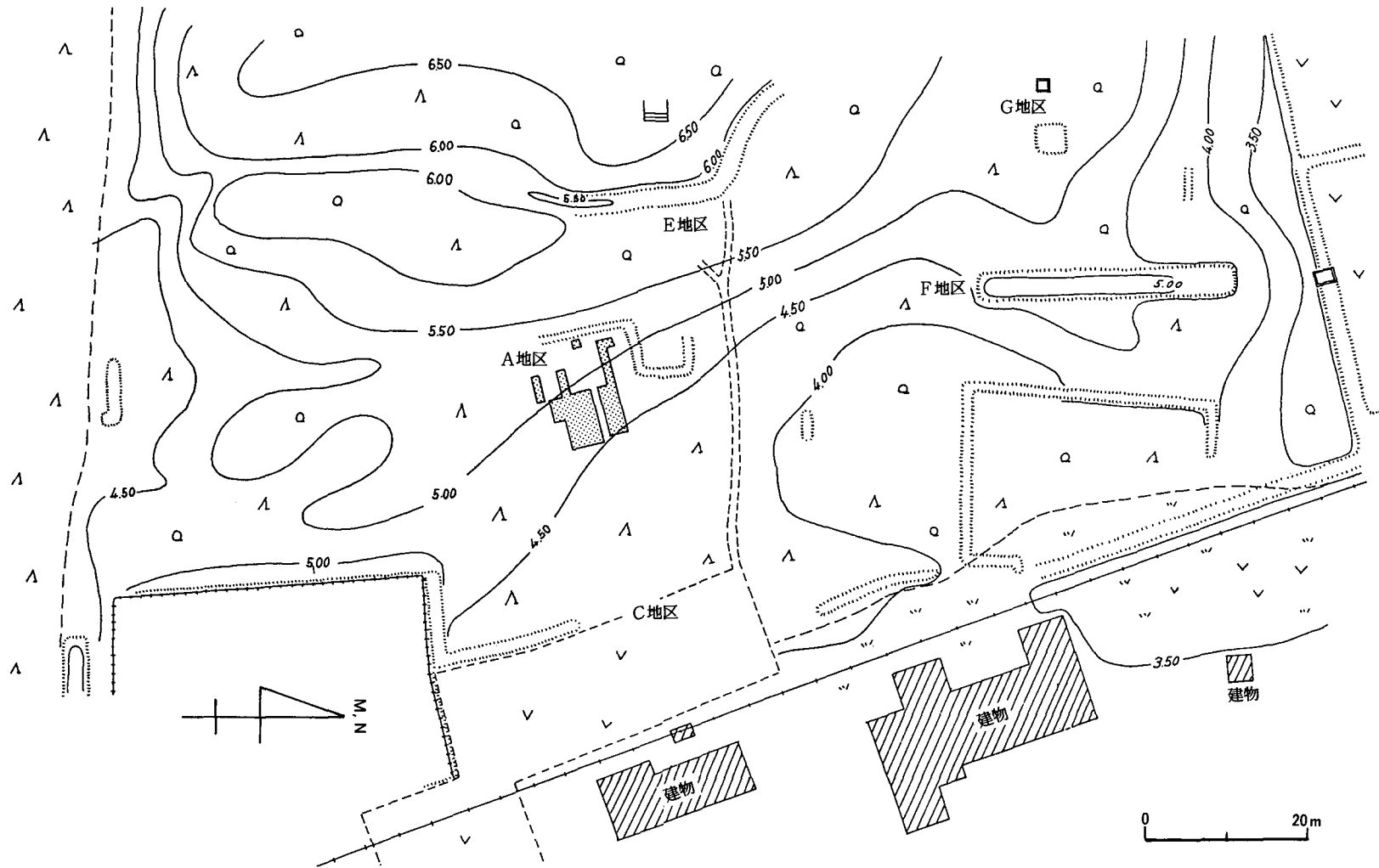
4 表層地質と考古学的事象との関係

今回の檀林寺跡の発掘調査では、第99図に示す（A・A'・A"・B・C・D・E・F_{1~6}・G）の各トレンチの発掘をおこなった。それらのうち、A・A'・A"・B・Cは以前に遺物や礎石と思われる石の出土したとされる地点、D・F₁は調査地内にある土塁を切る地点、Eは忠魂碑、Gは土壇状の高まりの各地点に相当し、F_{2~6}はF₁において発見された溝の延長にあたる地点である。ここでは発掘によって明らかにならなな事象を表層地質との関係について述べる。

まず、遺物（陶磁器類）との関係についてみると、包含層は第Ⅱ層以上に限られ、第Ⅲ層以下からは出土していない。



第98図 E-F、A-C間およびG-F間表層地質断面図



第99图 十三湊遺跡隠居地点調査地地形図

十三湊遺跡隠居地点（いわゆる丘樺林寺跡）の調査

また、A・A'・A"・Bの各トレンチにおいては、礎石の破片かと思われる5~20cm程度の多数の角礫が出土している。これらの石の起源については不明であるが、その層位的位置についてみると、大部分はI-a-0中あるいはI-b-2上(I-a-1, I-b-0, I-b-1は極めて薄いか欠除している)に位置しており、I-b-2の上面あるいはそれ以降の堆積面を生活面としていた人々によってもたらされたものと考えられる。ただ、Bのトレンチにおいては、例外的に第II層にくだり込んでいる石があり、これがどのような意味をもつのかは今後検討する必要がある。

これらの出土遺物に対して、調査地内には中央北よりから北にのびるものと、南端から東にのびる2本の土塁と思われる高まりが存在している。高さ1m前後、幅2~3mのこれらの土塁らしき高まりの構造を知るため、DおよびF₁のトレンチが掘られた。その結果、これらは盛り土によって形成されているが、その中央部の軸方向に深い第IV層に達する溝の存在することが明らかになった。F₁トレンチにおけるこの溝はF₂のトレンチの作成により土塁の延長方向に南にのびることが明らかになった。ここで注目すべきことは、この溝がD、FのどちらにおいてもI-b-2層から掘り込まれていることである。ただ、土塁自体を構成する土は成層状態を示しておらず、各種の土を混合したようなものであるのでその形成時代を明確におさえることができないが、少なくともI-b-2層の上面を生活面とする人々によってこの溝が掘られたことは明らかである。

一方、AおよびA'のトレンチにおいては、表面の比較的やわらかい地層をとり除くとかなりしまった比較的硬い面があらわれ、その表面を掘り込んだ十数個のピットが確認された。この比較的硬い地層も土塁の場合と同じくI-b-2であり、上にあるやわらかい地層はI-a-0, 1, ピットを充填しているのはI-a-1であった。また、A"においては、直径42cm深さ88cmの円筒状の掘り込みがI-b-1以下を切ってつくられており、更に深い溝がI-b-1あるいはI-b-2以下を掘り込んでつくられていた。円筒状の掘り込みを充填する堆積物については不明であるが、浅い溝を埋めている堆積物はA, A'の場合と同じくI-a-1の堆積物であった。

以上のことから、I-b-2の上面あるいはI-b-1(この両者は時間的にそれほど大きな隔たりはないであろう)の時期に溝あるいはピットを掘るような人出が比較的硬い当時の地表面にかなり大規模に加わったことが推定できる。

5 深津地区における発掘結果について

十三集落内では以前に青磁の大皿が出土しており、今回その大皿の出土した地点について改めて発掘をおこない、地層の観察をおこなった。

発掘は十三集落南部のバス通りがほぼ直角に向きを変えるT字路の真東200m付近の深津地区

の畑においておこなわれた。

層序は以下に示すようにⅠ～Ⅴ層（檀林寺跡のⅠ～Ⅳ層とは対応しない）に分けられ、遺物は第Ⅱ層に集中した。

<Ⅰ層> 0（地表）～25cm

灰褐色中～粗砂，小礫（2～4mm）混入。わらなど混入。

<Ⅱ層> 25～48cm

黒褐色中砂，小礫（2～5）mm混入。

遺物（石・炭・陶磁器破片など）出土。

<Ⅲ層> 48～90cm

灰褐色，粗～中砂，上部ほど粗い。

<Ⅳ層> 90～105cm

黒褐色シルト混り，中～粗砂，黄褐色シルト混入。

<Ⅴ層> 105cm以下

灰褐色細～粗砂，黒色のバンド何本か発達。

これらのうち，第Ⅴ層は灰褐色の細～粗砂であるが，不規則な黒色のすじが何本か発達しており，ラミナ状の構造も認められ，水中堆積の状態が考えられる。前述の大皿はこの第Ⅴ層に相当する深さから出土しているが，遺物が第Ⅱ層に集中し，第Ⅲ層以下には全く認められないこと，Ⅴ層が水中堆積の様相を示しているなどのことから，大皿が自然状態で埋まっていたのかどうかの確認が必要であると思われる。

〈注〉

（1）マンセル土色記号。

（2）この地域において縄文海進の最高海水準は4m前後と考えられている〔海津 1976〕。

参考文献

海津正倫 1976 「津軽平野の沖積世における地形発達史」『地理学評論』第49巻11号。

（海津正倫：名古屋大学文学部，国立歴史民俗博物館特定研究協力者）